

ナレハトテ、念仏ヲタニモ申セハ、三心ハ具足スルナリ

ほかにも『一枚起請文』などに、行具の三心に関する言葉が残されている。

●第六節 本願の三心

前節でも触れたように、法然は本願の三心ということを強調するのである。これは、丸山先生によれば(「前出」)、行具の三心に対する理論的根拠をそこに求めているからであると言
う。

本願の三心という言葉は、『選擇集』撰述の八年前、東大寺における『觀經釈』に出る、法然の思想形成に大きく関与している言葉と見ることができ
る。

『觀經釈』によれば、「今此經三心、即開本願三心」とあり、「至心者至誠心也、信樂者深心、欲生我國者回向發願心也」(『法全』一二六頁)とそれぞれ対応させている。法然はここで、先に述べた総別の三心の根拠として取り上げている。すなわち本願の三心と觀經の三心が一致するので、三心は本願である念仏にも『觀經』に説かれる諸行にも通じ、ゆえに正雜二行に通じ、九品に通じ、それゆえに、念仏は上上品に通じるとい
う三段論法的理論を展開しているのである。

次に本願の三心が強調されるのは、前節で述べた行具の三心の根拠としての本願の三心である。『七箇条の起請文』には、法藏菩薩が昔五劫の間、心を碎き立てられ成就された本願の三心であるから、いかに無智者でも自然に三心を具することができる、次のように述べられている。

これは阿弥陀ほとけの法藏菩薩のむかし、五劫のあひた、よるひる心をくたきて案したて、成就させ給ひたる本願の三心なれば、あたあたしくいふへき事にあらず。いかに無智ならん物もこれを具し、三心の名をしらぬ物までも、かならずらに具せんする様をつくらせ給ひたる三心なれば、(中略)た、ひらに信してたにも念仏すれば、すゝろに三心はあるなり

〔法全〕 八一頁

『十二問答』（『法全』六四一頁）にも本願の三心が、たとえをもって平易に説かれている。この本願の三心をもつて、さらに『阿弥陀経』の一心不乱の一心へとその論理は展開していくのである。（『要義問答』・『法全』六二六頁）。